

アサギマダラ

向井田 周明

孝一こういちおじが生前、こう言ったことがある。

——ホモ・サピエンスはね、ホモ・モビリタスでもあるんだよ。

まるで呪文のような言葉だけど、ホモ・モビリタスというのは「移動する人」という意味らしい。孝一おじによると、動物の中で移動し続ける本能を持っているのはヒト属だけなのだという。ヒト属の中でも、その本能を最も強く受け継いだのが、われわれ現生人類であるホモ・サピエンスだった。何万年も前にアフリカを後にして以来、ホモ・サピエンスは、時には島影のまったく見えない海をも渡って、ほかのヒト属がたどりつけなかった新しい土地へと移動し、子孫を増やしていったのだ。やがて、地球上にどこにも移動する場所がなくなれば、次は必然的に、別な星へと移動していく。それがホモ・モビリタスというものなのだと。

もし、おじの言う通りなのだとしたら、まさに今日、火星への初の有人飛行に臨む健太けんたこそは、そんなホモ・モビリタスの正当な末裔まつえいと

いえるのかもしれない。

だけど、とわたしは思う。

たとえば地球が今のような姿にならなかつたとしても、健太は火星を目指していただろうか。三万年前に旧石器人の「水先案内人」になつたとおじが言うアサギマダラと同じ道を、はたして健太は選んだだろうか。

「蝶々ですか？　きれいなアクセサリー」

点滴を調節し終えた看護師の高木たかぎさんが、

ベッド脇の床頭台の上にある古びた菓子箱を見ている。箱の中の貝製品が目に残ったらしい。

「もらったのよ、以前同じ集落に住んでいた人から。……もう、亡くなったんだけど」

「そうですか。大事なものなんですね」

琉球列島の考古学に興味のある人なら、その加工品が縄文時代の蝶形骨製品ちやうがたこつせいひんをまねたものだとわかったかもしれない。本物の蝶形骨製品は、ジュゴンの骨で作られている。けれ

ど、箱の中にあるのは、孝一おじがヤコウガイで作ったレプリカだ。おじから譲り受けて、もう十年近くになる。

ナースワゴンを引き寄せながら、なにげなく壁のモニターのほうに目をやった高木さんが、急に大事なことを思い出したように、わたしを振り返った。

「そういえば、宇宙飛行士の間島健太まじまけんたさんも、同じ集落だったんですってね。しかも小学校から高校まで、ずっといっしょだったって。そうなんですよね？」

「え、ええ……」

おしゃべりの母から聞いたのだろうか。

「うらやましいなあ。あんな有名人と同じ集落で、しかも同窓だなんて」

「同窓といっても、あまりしゃべったことはないから……」

「もったいない。サインくらいもらっとけばよかったのに。いまや島の誇りですよ。ここだけの話、間島さんが一時帰国した時、島にも墓

参りに戻って来たじゃないですか。実はあの日、わたしも空港に行ったんです。けど、すごい人出で、サインもらうどころの話じゃなくって」

高木さんの表情が、打って変わったように華やいでいる。その屈託のない笑顔が、いまのわたしにはひどくまぶしい。

「少しボリューム上げときましようか。もうすぐですよ」

リモコンに手を伸ばそうとした高木さんを、わたしはそっと左手で制した。

「映像だけでいいの」

壁のモニターには、打ち上げ間近のロケットが大きく映し出されている。あのロケットの中に、健太がいるのだ。

「じゃあ、点滴終わったら知らせてくださいね」

新人らしいいきびきびした足取りで、高木さんは病室を出て行った。病気の進行で看護専門学校をやめることがなかったら、わたしも

彼女と同じように、どこかの病院で業務をこなしていたのだろうか。学校をやめてからもう六、七年になる。その間に、健太はアメリカの大学で宇宙飛行士になる勉強をつづけ、わたしがこの病院に入院した少しあと、宇宙飛行士に選ばれたのだ。高木さんの言うとおり、健太は島の誇りだった。けれど、健太もわたし同様、この奄美大島の生まれではなかった。

わたしは小五の時、母の生まれ故郷であるこの島に、母と一人だけでやってきた（母と父はその二年前に離婚していた）。母が移住を決めたのは、わたしが喘息に似た病気を患っていたからだ。東京よりも島の空気の方がいいだろうと考えたのだ。

島に移ってくるとすぐに、集落の小学校の五年生に編入となった。全校生徒は五十人足らず。それでも島では特別小さいというほどでもなかった。母はずいぶん心配していたようだけど、学校の雰囲気にはすんなりと溶け

込んだように思う。かといって、仲の良い友人ができたわけでもない。いるのかどうかかわからないくらい、存在感のない子どもだったのだ。

同じ集落に暮らしていた孝一おじも内地の出身だった。けれど、奄美の歴史にとっても詳しく（若いころ沖縄の大学で考古学を学んだらしい）、当時は島の北部にある郷土資料館で働いていた。小さいころから、外でみんなと遊ぶよりも、縄文土器や土偶の図録などを眺めているのが好きだったわたしは、孝一おじとすぐに仲良しになり、おじの家にもよく通うようになった。

そして、小六の夏の終わり、海岸近くで拾った土器片を見てもらおうと、いつものように孝一おじの家に行った時、庭に見知らぬ男子が立っているのを見かけた。それが健太だった。その時健太は、パイヤの木を珍しそうに見上げていたのだった。

健太は、二学期からわたしと同じ小学校に、

同じ六年生として通い始めた。その後、健太とは、中学の三年間、そして名瀬の高校も一緒となり、高校卒業までずっと同じクラスで過ごした。

健太が島に來た詳しい事情は知らない。親戚に当たる孝一おじのところへ、小学校が終わるまでいるらしいと、母からは聞いていた。しかし、その間に健太の両親が離婚することになり、健太は自分自身の意志で、孝一おじとともに島に住み続けることを選んだ。わたしの記憶する限りでは、その後、高校を卒業して健太が島を出ていくまで、健太の親が島を訪ねてきたことは一度もなかった。

両親の離婚は、わたしと同じ境遇だったわけだけど、だからといって、そのことでお互いに親近感を抱くようなことはなかったと思う。

小六から高三まで、七年間も同じクラスで、しかも高校には毎朝同じバスで通っているとさえ、つきあってるんじゃないの、と冷やかにクラスメートもいたけれど、そんなことは

ありえない。同じ集落に住んでいたのだから、顔を合わせれば普通に話をすることはあった。だけど、校内で話をしたのは、七年間で数えるほどだ。スポーツマンで人柄の温厚な健太のまわりには、男子であれ女子であれ、いつも誰かがいたし、一方のわたしは、あまり誰とも口をきかず、親友と呼べるものもなく、ぱっとしない人間であり続けたのだから。

健太は高校では陸上部に所属していたので、「帰宅部」のわたしと帰りのバスが一緒になることはめったになかった。校庭の前の停車場で帰りのバスを待つ間、気づくと健太の走る姿を目で追っていたことがあった。いま思えば、決して健康な人たちへの憧れからだけではなかったのかもしれない。だけど、それが好意という感情なのかどうか、誰にも教えてもらったことはなかった。

高二の春に一度だけ、通学のバスで健太と隣同士に座ったことがある。

朝の早い時間帯は乗客もまばらで、同じ高

校や名瀬の中学に通う後輩たち数人が、二人掛けの席を一人で占領しつつ、ばらばらに座るのが常だった。しかし、その朝は珍しく多くの大人たちが乗り込んでおり、席はあらかた埋まっていた。話の様子では、いくつかの大学の研究者からなる生態系の調査団のようだった。わたしが乗り込んだときには、後ろから二番目の二人掛けの席がころうじて空いており、そこに一人で座った。

いつもの通り健太は発車ぎりぎりまで飛び乗ってくる、人の多さに少し驚いたようだったけど、空いている席を探して歩いてくる。わたしは、音楽が聴きたいわけでもないのに、あわててポケットからイヤホンを取り出すと、両耳に差し込み、窓の外に目をやった。その数秒あと、わたしの座っている席がぐっと沈み、ちらりと見ると、健太が横に座っていたのだった。

調査団一行のなごやかな笑い声とは対照的に、わたしの右半身は、不思議なほど緊張して

いたように思う。高校に着くまで、そのまま音楽を聴いているふりをしておこうと思ったのに、ふいに健太が話しかけてきた。

「あき亜希、進路もう決めたのか」

「え？」

わたしは思わず健太を見た。イヤホンをして音楽を聴いていたのなら、そんなに素早く反応できたはずはないのに、そのときは健太の意外な言葉にびっくりして、そこまで考える余裕がなかった。

「進路？」

「俺は島を出るよ」

健太は、前の座席のほうを見たまま、そう言った。

わたしは、イヤホンを外しながら、「そんなんだ」とだけ答えた。

島に大学はないのだから、大学へ進学する者は島を出ていく。健太は県内でもトップクラスの成績だったので、当然、内地の大学に進学するのだろうとは思っていた。健康にあま

り自信のないわたしは、島を出る気はなく、島で唯一の看護専門学校への進学を考えていた。そうなれば、健太と顔を合わせることもなくなる。だからといって、感傷に浸ったりはしない。いつか別々の道を歩むことは、最初からわかっていたことなのだから。

そもそも、わたしはそれまでも、あまり感情を表に出さず、他人とは一定の距離を持って接してきたつもりだ。生まれつきそういう性格でもあったのだろう。けれど、小学四年の頃からわずらっている病気のこと、無視できない要因だったかもしれない。

「火星に行ってみたくないか」

健太は、唐突にそう聞いた。

「火星？」

「ああ。火星の居住ユニットの中なら、地球の汚染物質もないし、亜希の病気だって、よくなるかもしれないじゃないか。俺が連れてってやるから」

こともなげに健太は言った。まるで今度の

週末、空港の先のアヤマル岬に連れて行ってやるとでもいうように。

わたしは、じつと健太の横顔を見た。ずいぶん長く見つめていたような気がする。その視線を感じたのか、健太は笑いながら続けた。

「俺が宇宙飛行士になれて、火星に居住ユニットができてからの話だから、お互い、じいさんばあさんになってるかもだけどな」

そう言うと、健太は反対側の窓のほうに視線をやり、それっきり何も言わなかった。わたしも、何も言わなかった。

——火星に行ってみたくないか。俺が連れてってやるから。

健太にしてみれば、軽い冗談のつもりだったのかもしれない。たぶん、その年の初めに大々的に報じられた火星移住計画のことが頭にあったのだろう。だけど、バスが学校に着くまで、いや、その後もずっと、わたしは何度も

その言葉を頭の中で繰り返した。その言葉が、頭を離れなくなった。

医者から喘息だろうと言われ続けていたわたしの病が、実はそうではないことは、世界規模での症例の増加によって徐々にわかってきた。けれど、移住当初はまだ原因が絞り込めておらず、なぜ若年層のみ発症するのもわかっていなかった（若年層のみ発症する理由はいまもよくわかっていない）。根本的な治療法もみいだせず、死に至る病なのかどうかも判然としないまま、ずっと宙ぶらりんの状態に置かれ続けていたのだ。

移住してきた直後に世界中で猛威を振るった新型コロナウイルスと違って、この病気がどうやら人に感染するものでないらしいことは、せめてもの救いだった。高校くらいまではまだ、ときおり喘息に似た症状が出るくらいで、たいていはすぐに治まり、入院する必要もなかった。けれど、どうしても抜けない慢性的な倦怠感と微熱は、少しずつ、わたしの中から気力を

奪っていったように思う。

高校に上がるころになって、空気中の未知の汚染物質が病気の原因であるとの説が、欧米の研究者たちによって打ち出され、その方向での研究が急ピッチで進められるようになった。おそらく健太は、そのことも知っていたのだろう。だからといって、火星に連れて行ってやるという言葉を真に受けたわけではない。ただ、宇宙飛行士になるという彼の言葉には、うそはなかった。

そもそも健太は、いつから宇宙飛行士になりたいと考えていたのだろうか。のちにテレビのインタビューで、「宇宙へ冒険の旅に出ることが、小さいころからの夢でした」と語っていたけれど、それが本心だとはどうしても思えない。そんなロマンチックな思いとは裏腹に、健太を火星に向かわせたのは、深い絶望と怒りだったのだと、わたしはいまでも思っている。そう思ったのは、同じ高二的の初夏、ハマオレでの出来事があったからだ。

島の伝統的な農耕儀礼のひとつであるハマオレの日には、料理や酒などを浜に持ち寄りにぎやかに過ごす。その時に舟漕ぎ競争が催される集落も少なくない。わたしの住む集落でも舟漕ぎ競争は昔から行われていて、集落人口が多かったころは、青壮年団だけでも五、六隻の舟が競ったものだと言った。しかし、わたしが高校に入るころには、青壮年団に子どもや婦人会メンバーも混ぜて、なんとか競争の体裁を整えるようなありさまだった。だから、競争といっても和気あいあいとしたもので、まだゴール手前だというのに、舟から海へ飛び込むお調子者もいたほどだ。むしろ、その日のメインは、競争の後に表彰式の名目で行われる飲み会だった。

集落振興センターの大広間での表彰式を終えると、すぐに本格的な飲み会に移行した（酒が苦手な孝一おじは、こうした場に顔を出すことはなかった）。四タンク用意していた生ビ

ールはあつというまに空になり、黒糖焼酎の瓶もすでにかなりの本数が空いていた。こうなると場の空気もすっかりだらけてきて、酔っぱらって舞台の上で寝転んでいる者もいる。ごちそうで腹を満たした低学年の子らは、あたりかまわず走り回っている。歌好きたちは、頃合いとみてか、カラオケ装置のセッティングをはじめていた。わたしはといえば、すっかり腰を据えて近所のおばたちと話し込んでいる母をおいて、疲れが出る前に家に帰ろうと、席を立つタイミングを計っていた。

空いたお皿を片付けようと立ち上がった時、広間の一画から大きな声が聞こえてきた。みると、一升瓶を大事そうに抱えて酔っぱらっている茂雄しげおおじだった。茂雄おじはもと中学の先生で、定年後は放課後の児童支援のボランティアを務めていた。普段はまじめで無口だけど、泣き上戸で有名な人だ。酔って泣きながらあたりに「正論」をぶちまけるのがうつつとうしいと、周囲の大人たちはあまり酒を進め

ないようにしていた。本人もそれなりに気をつけていたようだけど、自分たちのグループが優勝したこともあって、つい飲みすぎたのだろう。

「わんは子らに謝りたいっちよ。なんもかも、わんきやが悪いっちば。くん通りよ」

何をあやまっているのかわからなかったけど、横から一升瓶を取り上げようとする要吉ようきちおじを押しやるようにして、しきりに頭を下げている。目にうっすら涙を浮かべているようにも見えた。その近くでは、健太が素知らぬ顔でジュースを飲んでいる。

「わんが言いたい人は、いったい誰がこんな地球にしたかっちゅうことっちよ。政治家か？ 資本家か？ そぎゃんやつらもひっくるめて、わんきや大人全員ちよ。大人がこんな地球にしたんじゃが。やんきや、うんことの責任を感じたことがあるか」

「ありまーす」と、少し離れたところから、酔っぱらった啓介けいすけおじが、茶化すように手を挙

げる。その周辺から、笑い声がおこった。茂雄おじのいつもの「正論」が始まったと、揶揄しているのだ。茂雄おじは、それを無視して話した。続けた。

「遅かれ早かれ、地球がこうなることは、ずいぶん前からわかってたくとうちば。それを見て見んふりしてやり過ごしてきたんど。そのつけがとうとう回ってきたんじやが。やんきや、本気で自分の孫を火星なんかに住ませたいっち思うか。え？ どうね」

そう言って、周りの大人たちを酔った目で見らみつけるようにしながら、一人ずつ指差していった。

茂雄おじがその時、火星のことをわざわざ持ち出したのは、もちろん火星移住計画のことが頭にあったからだろう。

アメリカが早くからそうした計画を進めていたのは周知のことで、ほかのいくつかの国も、競うように独自の火星探査プロジェクトに取り組んでいた。しかし、その年の一月、各

国代表は突然、共同会見を開き、今後は一致団結して火星移住プロジェクトを推進していくと発表したのだ。なぜ利害の対立する国同士が手を組むのか、いぶかる向きもあったけど、火星移住なんて夢のある話だし、なんにしろ協力しあうのはいいことだと、マスコミは大々的にこの話題を取り上げた。

ほぼ同時期、別な記者会見も開かれていた。地球温暖化に警鐘を鳴らし続けていた科学者グループが、気候変動に影響を与える主要な要素のすべてにおいて、「臨界点を越えたとみられる」と発表したのだ。こちらのニュースは、当時、それほど大きく取り上げられなかった。臨界点というのが一般の人々にはピンとこなかったし、そもそも大げさに警鐘を鳴らすのが彼ら科学者の常だと思われていたからだろう。

しかし、二つのニュースを見比べて、なにかのつぴきならない事態が生じているのかもしれないと敏感に感じ取っていた人たちもいた

のだ。茂雄おじも、そうした一人だった。

「もう何年前になるかや」

少し落ち着きを取り戻したように見える茂雄おじが、ぽつりと言った。

「地球温暖化対策の会議で女の子が演説したことがあったろ。わたしは許さないって。何もしない大人を許さないって。わんはあん時、あの言葉に心臓をグサツと一突きされたつちよ。実際、胸が痛かった。涙が止まらんかったつちば。このわんが、二日間、一滴も酒が飲めんかったんど。わんは、心底、自分が情けないっち思った。そんな頃はまだ教師だったもんね、よけいそう思ったつちよ。こんなダメな大人が、えらそうに教育者つち言ってるいいの cattchi。……だんば、要吉よ。わずか二日だけよ。その痛みも三日目にはきれいに消えた。そうやって、また、いつも通りの生活よ。いつものように仕事に行って、帰ってきたら大酒飲んで、いびきかいて寝て、そういう生活に、あっけなく戻ったよ。何も変わらん、いつも通りの生活に

……」

いま思い返せば、茂雄おじがそう語ったころは、気候変動を含めた環境問題の悪化について、まだ楽観的な見方のほうが多かったと思う。しかし、そんな人々ですら身の危険を感じ始めるのに、それから三年もかからなかったのではないか。変動が予想以上に加速したからだ。

急激な気候変動の影響は、この島にいても感じる事ができた。サンゴは完全に死滅し、砂浜も急激にやせ細った。常態化する酷暑を受けて、海水浴を含めた夏場の野外レジャーに一定の制限を設ける条例が制定されてからは、観光客の足も一気に遠のいた（島以上に酷暑が深刻だった内地でも、同様の条例は各地で制定されていた）。

海外の国々はもっと悲惨だった。干ばつの進むアフリカでは、水と食糧を求めて大規模な民族移動が起こり、国境での紛争は手が付

けられない状況になりつつあった。大洋州の小さな島国だけでなく、先進諸国の沿岸部の都市の中にも、数年以内の水没が避けられないところが出始め、内陸部へ逃げ出す人々が増えていた。南北アメリカやオーストラリアの絶えることのない大規模な山火事は、地球の空気を煤煙で汚染していった。溶けだしたツンドラの下からは、太古に封じ込められていた未知のウイルスも大気中に漂い出していた（わたしの病気が、そうしたウイルスに関連する可能性を指摘する研究者もいた）。「臨界点を越えた」ことの意味を、人々は身をもって知ることとなったのだ。

もはや自国の名誉をかけて単独で火星探査に取り組むなどと悠長なことを言っている場合ではない。早晚、この地球に人が住み続けられなくなる可能性がある。だから地球上の英知を集めて早期かつ確実に、人類が生き延びるための方策を一つでも多く確保しなくてはならない。あの年の初めの火星移住計画共同

発表の背景に、科学者たちのそんな危機感があつたことは、いまでは誰もが理解している。

「簡単に地球を見捨ててしまつていいのか」と、火星移住計画に批判的な声ももちろんあつた。わたしですら、ほかに道はないのかと思わないでもなかつた。けれど、どうすれば住みやすい地球環境を取り戻せるのか、誰にも妙案はなかつた。火星移住という、どちらかといえばSF的なメルヘンでもあつた計画は、いまや人類生き残りのための最も重要な選択肢だつたのだ。

その計画によれば、当初は居住ユニットの閉ざされた空間内での生活を余儀なくされるけれど、テラフォーミングの技術により、火星の上を自由に歩き回れる日が来ることも夢ではないという。事実、火星の大気の九六パーセントを占める二酸化炭素から酸素を作りだせることは、すでにNASAの探査機の実験によつて確かめられていたし、火星の地下に水が存在することもわかつていた。

けれど、どれほど綿密な移住計画を立てられていたとしても、まずは実際に人間が火星に到達でき、無事に帰還できるということが証明されない限り、火星移住をリアルなものとして一般の人々が受け止めるのは難しい。だからこそ、有人飛行の実現が待ち望まれていたのだ。

気づくと要吉おじは、もう茂雄おじを止めようともせず、だまってその話に耳を傾けていた。茂雄おじの「正論」に薄ら笑いを浮かべていた啓介おじやほかの大人たちも、酒を飲む手は止めないまでも、耳を傾けているように見えた。

「わんは情けない。大人として情けない。子供を持つ親として情けない。この地球の汚染された空気のせいで、病気にかかって苦しむ子らもおるんど。そういう子らに、わんきゃ、なんもしてやれんちよ。そうだろ」

その瞬間、何人かの大人が、わたしのほうを

ちらりと見たのがわかった。わたしは思わず目を伏せた。

その時だった。

「くだらねえこと言ってんなよ。ほんとにすまないって思うんだったら、いまからだって行動起こしやいいだろ。そんなクソ話、聞きたくもねえよ。黙って酒飲んでろよ」

健太だった。あの温厚な健太が、今まで見たこともないような強い調子で、大勢の大人たちの前で、そう言いになったのだ。

健太の言葉に、明らかにその場の空気が凍りついた。けれど、それは、健太が憤然と席を立って広間を出ていくまでの、ほんの短い時間に過ぎなかった。その間、茂雄おじは、固まったように、じっと一升瓶を見つめていた。

「ささ、カラオケ、カラオケ。酔っ払いじじいの話なんか、だれも聞きたくないだろ。みんなお待ちかね、カラオケタイムちゃ」

啓介おじがおどけた調子で言った。ふだんは年長者への口のきき方に厳しい集落のおじ

たちなのに、その時は誰も健太を非難しなかった。楽しい飲み会を台無しにしたくないと思ったのか。それとも、健太の言葉に何かしら感じるものがあつたのだろうか。いずれにしても、強引な幕引きを凶つた啓介おじの一言で、何事もなかったように会場は活気を取り戻したのだ。

わたしは、素早く洗い場に向かうと、手に持っていた皿を流しに置いたまま、急いで建物の外に出た。健太の後ろ姿が、浜に下りる小道に見えた。わたしは、そのあとを追った。その時なぜ追いかけたのか、自分でもよくわからない。

健太は浜に立ったまま、じつと夕暮れの海を見ていた。わたしは、すぐそばまで行って立ち止まった。

「俺は、ああいう大人が大嫌いだ。自分は子どもたちのことをかわいそうに思ってるとか、そんなもつともらしいこと言つて、実際はただ単に、そう言ってる自分に酔ってるだけじ

やないか。ああいうやつらに限って、自分ではぜったい何もしないんだ」

健太は、こちらに背を向けたまま言った。

健太が世の中の大人たちを、そのような目で見ていたとは意外だった。いつだって穏やかな目で、周囲の人たちを眺めている。そんな印象しかなかったから。これは勝手な想像だけれど、自分を引き取るとも言わず、その後、一度も島に訪ねてくることもなかった両親のこと、健太の心の片隅に、少しはあったのかもしれない。

「亜希はどうなんだ。許せないと思わないのか。病気になったのも、これまで何もしなかった大人たちのせいじゃないか。放っておけば、後々どんな影響が出るか十分にわかってたよ。せに、何もしないできた大人たちのせいだよ。そうだよ」

健太が振り向いて言った。健太の目は、まっすぐわたしに向けられていた。そのままざしの強さにおののいて、わたしは思わず目を伏

せた。

空気中の汚染物質がわたしの病気の原因であることは、そのころにはほぼ確実視されていたし、環境汚染の責任の多くがわれわれに先行する世代にあることも、否定できないところだろう。実際、同病者の中には、気候変動や環境の汚染に無関心が続けた大人たちへの恨みを口にする者も少なくなかったのだ。

けれどわたしは、自分の病気が大人たちのせいだと思ったことは一度もなかった。そういうことを考える以前に、初めから自分の人生をあきらめていたのだから。

「大人を責めたって意味ないのはわかってる。いまさらどうしたって流れは止められやしない。だけど、二、三十年後の俺が、いまよりもっとひどいことになっているこの地球の上で、あいつらと同じように、現実から目をそらして酒をかつくらってるかと想像するだけで反吐が出そうになるんだ。俺はあいつらのようになりたくない。俺が言ってることは変か？」

わたしは、うつむいたままだった。何か言わなければと思っても、何と言えればいいのかわからなかった。健太がどんな表情をしていたか見えなかったけど、きつと射るような目でわたしを見続けているのだろう。

恐る恐る顔を上げると、やはり健太はこちらを見ていた。けれど意外なことに、その目はひどく哀しそうに見えた。

「健太……」

そう言ったまま、言葉が続かなかった。

健太は黙って走り去った。わたしは、その後を追うことすらできなかった。

いまでも、自分がその時、何とすべきだったかわからない。わたしも健太と同じ思いだと言うべきだったのだろうか。健太と一緒に憤るべきだったのだろうか。自分たちのツケを未来の子どもたちに平然と押し付ける大人たちを、そして、自分たちの都合だけで子どもを捨てた親を、二人でいっしょに糾弾すべきだったのだろうか。そうすれば、健太との間に、

何かが始まったのだろうか。

けれど、それはわたしにはできなかつた。おそらく、そのときのわたしは、心のどこかで、うすうす感じていたのだ。死に向かつているのかもしれない自分の姿を、まるで他人事ひとごとのよう^ひにただ眺めていただけのわたしの態度も、健太の嫌悪する大人たちの態度と何ら変わるものではないのだと。きつと健太の怒りは、すべてをあきらめていたわたし自身にも向けられていたに違いないと。

「今度の日曜、アサギマダラを見に行かないか」

孝一おじが、わたしを誘ってくれたのは、そんな出来事があった年の十月下旬だった。アサギマダラの渡りの季節がやってきたのだ。

アサギマダラは、国内で唯一、長距離の渡りをする蝶として知られている。その生態は、まだよくわかっていないことも多いけど、春から初夏にかけて、南の方から奄美を經由して

内地に至り、北海道辺りまで飛んでいく。秋は逆に、島を経由して、もつと南まで帰っていく。十月から十一月ごろは、内地から蝶が戻ってくる時期なのだ。

アサギマダラを見たいというのは、わたしの希望だった。そのひと月前、孝一おじからいつものように考古学の話聞いていた時、この蝶の話が出てきたからだ。

その日孝一おじが話してくれたのは、三万年以上前に沖縄本島に暮らしていた旧石器人たちは、そもそも、どこからどうやってたどり着いたのかということだった。

種子島や屋久島から与那国島までを含む琉球列島は、大小の島々が点々と弧状に連なっている。島々が連なってみえるのは、琉球列島が太古に橋のようにつながっていたことの名残りだ。まだ氷期の真っ最中だった三万年前は、いまより百メートル近く海面が低かったので、そうした陸橋が現れていて、旧石器人は台湾方面からその橋を歩いて沖縄や奄美に渡

ってきたという説が以前はあった。しかし、その後、海底調査などが行われた結果、その説は否定された。沖縄も奄美も、いまより多少面積は広いものの、独立した島だったというのが現在の定説だ。

だから、沖縄や奄美に三万年前に初めて住みついた旧石器人は、舟に乗って、海を渡ってきたことになる。当時すでに黒潮も存在していたらしいので、彼らの舟は、速い流れを乗り切るだけの性能を有していたはずだ。いかだや草舟にはそんな推進力はないので、おそらく彼らは丸木舟を使って渡海したのではないかと考えられている。事実、丸木舟ならば手漕ぎでも黒潮を横切れることは、わたしが奄美へ引っ越してきた年に、台湾から与那国島への渡海実験で確かめられ、当時大きなニュースになった。

そうした成果からみれば、日本への主要な渡来ルートの一つと考えられている南島ルートでは、人類は丸木舟に乗って沖縄本島や奄

美にやってきて、最終的に九州本土にもたどり着いたのだろう。だけど、孝一おじによれば、それほど話は単純ではないという。ネックになるのは、宮古島と久米島間の距離だ。

当時まだ中国大陸と陸続きだった台湾を起点として、宮古島までは、おそらく目の前に見える島を一つずつ渡ってたどりついたはずだ。実際、石垣島でも宮古島でも二万数千年前の人骨が見つかっていて、彼らは島伝いに台湾方面から渡ってきた可能性が高い。しかし、その先はどうだろう。宮古島から沖縄本島に近い久米島までは二百キロ以上も離れている。なので、宮古島からどんなに目を凝らしても、東の海に島影は見えない。島があるかどうかもわからないのに、わざわざ海を渡ろうとするだろうか。

黒潮に乗って、たまたま漂着したのではないか。しかし、島に人が住みつき、子孫を増やすには、女性を含めてある程度まとまった人数が必要になる。それだけの集団が偶然漂着

したとは思えないので、もし南島ルートで渡ってきたのなら、彼らは意図的に沖縄本島方面を目指したと考えざるを得ない。けれど、それだけの集団が水平線のかなたを目指す決断は、その方向に向かえば必ず島があるという確信がないとできないのではないか。地図もないのに、そんな確信はどうして生まれたのだろう。どうしても最初の疑問に戻りついでしまう。

だから研究者の中には、旧石器人が南島ルートで渡ってきたのは宮古島までで、その先まで渡っていくのは無理だったんじゃないかと考える人もいる。旧石器時代に沖縄本島や奄美に住み着いた人たちは、南からではなく九州本土から渡ってきたと考えるのだ。九州本土からなら、目の前に見える島を一つ一つたどれば、奄美にも沖縄本島にも確実にたどり着けるから。

わたしも、なんだかその考え方のほうが理にかなってそうだと思ったし、孝一おじもき

っと同じ考えだろう。わたしがそう尋ねると、孝一おじは黙って立ち上がり、居間のタンスの上にあったお菓子の箱を手にとって、縁側のわたしの所まで戻ってきた。中に入っていたのは、掌に乗るサイズのペンダントのようなものだった。

「蝶形骨製品といってね」

「ちようがたこつせいひん」

どんな漢字を当ててるのだろうと、わたしは機械的に復唱した。

「これと同じような形のものが、沖縄の縄文時代の終わりころの遺跡でいくつも見つかっているんだよ。これは以前、名瀬の中学校に考古学の出前授業に行ったとき、教材として作ったレプリカ、つまり複製品だ。本物はたいていジュゴンの骨で作られていたんだけど、いまはジュゴンの骨なんて手に入らないからね、とりあえずヤコウガイで作ったんだよ。せめて形と大きさだけでも知ってもらいたいと思って」

わたしは、そのレプリカを手を取った。ヤコウガイの真珠層が、きらきらと輝いている。ジュゴンの骨でつくった本物は、どんな色彩と触感だったのだろうか。

「この形は、おそらくアサギマダラをかたどったものだと思う。沖縄の縄文人にとって、アサギマダラは航海の守り神だったんだよ」

「航海の守り神？」

「ああ。だから縄文人たちは、これを作る時、あえてジュゴンの骨を使ったんだ。沖縄のある地方じゃ、古くからジュゴンは神様の乗り物と言われていて、舟の水先案内人とも考えられていたくらいだからね。縄文人にとって、アサギマダラもジュゴンも、同じような意味を持つ存在だったんだと思う」

宮古島や石垣島などの南琉球は、中世になって稲作がその地域に広がるまでは、沖縄本島を中心とする中琉球とはまったく別の文化圏を形成していた。それくらい宮古島と久米島との距離は、大きな壁であり続けた。しか

し、孝一おじの考えでは、両文化圏の交流は皆無ではなく、細々としたつながりには先史時代からあったのではないかという。彼らに海の向こうに島があることを教え、彼らの水先案内人になったのがアサギマダラだった。だから彼らは、アサギマダラを航海の守り神として位置づけ、それを神の乗り物であるジュゴンの骨でかたどり、しかも赤く彩色まで施して大事に身に着けていた。それが、孝一おじの仮説だった。

「縄文人だけじゃない。宮古島までたどり着いた旧石器人が、海の向こうに別の島があることを知ったのも、アサギマダラのおかげだったんじゃないかと思う」

「旧石器人も？」

「ああ。もつとも、ちゃんとした学者が認めるような話じゃないけどね。当時の人たちはわれわれ現代人と違って、鋭敏な感覚をもっていたはずだから、潮の流れ、風の動きなんかからも、いろいろな情報を得ていたはずだし、渡

り鳥の存在も大きかっただろう。けど、はかない蝶が、海の向こうに飛び立ち、やがて帰ってくる。そういう様子を観察していた旧石器人は、蝶が飛んでいく先に、間違いなく島があることを確信したんじゃないかな。蝶がたどりつけるなら、自分たちもたどり着けるはずだ、そう思ったんじゃないか。そう確信できたから、女性も連れて、ある程度まとまった人数で海を渡ることを決意したんだ。極端なことを言えば、アサギマダラがいたから、彼らは海を渡れた。もしアサギマダラが水平線を目指して飛んで行かなかったら、当時、南からの人の渡海はなかったと思う」

アサギマダラの群れが空に一筋の虹を作り、水平線へと延びていく。この虹をたどっておいでと誘うかのように。その呼びかけに応じて、旧石器人たちは、おもむろに櫂を手に取る。やがて丸木舟が静かに滑り出す。島に残る人たちは、小さくなる丸木舟をいつまでも見守りながら、アサギマダラの虹に航海の無事を

祈る。そんな光景が、三万年前に宮古島の浜で見られたのかもしれない。

もちろん、そんなことは誰にも証明はできないだろう。けれど、わたしにはなんとなく、おじの言うことが真実のように思えた。わたしの中で、急にアサギマダラの存在が大きくなった。

孝一おじは、その蝶形骨製品のレプリカを、それを入れていたお菓子の箱ごと、わたしの膝のそばに置いた。

「あげるよ。もう出前授業で使うこともないから」

その日から、それがわたしの宝物になった。わたしは、すっかりアサギマダラに魅せられてしまったのだ。そして、次の渡りの季節に、アサギマダラをぜひ見に連れて行ってほしいと頼み込んだのだった。

孝一おじが連れて行ってくれたのは、集落から車で十分ほどの山裾だった。草に覆われた細い道を、ハブに気をつけながら少し登っ

て行く。すると陽の当たる開けた場所にて、そこにたくさんのアサギマダラがいた。羽をゆらゆらさせながら花の回りを飛んでいる。長い道のりを旅してきたようにはとても見えない軽やかな舞いだ。けれど、その蝶たちは、つかの間の休息を終えると、再び海の彼方へ飛んでいくのだ。

外海で漁をしていた漁師が、アサギマダラが海面に浮かんでいるのを目撃したという話を聞いたことがある。力尽きて死んでいるのかと思ったその蝶は、突然、飛び立ち、北を指して去って行ったのだという。おそらく、海面で揺られながら休息を取っていたのだろう。そこまでして、アサギマダラは、何千キロも旅をするのだ。

「どうして海の向こうへ飛んで行こうなんて思ったのかな……」

自分でも無意識に、そんな言葉がこぼれた。

孝一おじは、それを聞いて笑った。

「健太も同じことを言ってたな」

「健太が？」

孝一おじは、健太にも同じ話をしたことがあるのだろう。そして健太も、わたしと同じ疑問を口にしたのだ。

「きつと、アサギマダラの本能に、渡りが組み込まれているんだと思う。人類だってそうだよ。危険を冒してまで新たな土地を目指して移動するのは、それが人類の本能だからだ。それをホモ・モビリタスという言葉で表現した人類学者もいる」

「ホモ・モビリタス？」

「ああ。移動する人という意味だ。移動することで生き延びてきたのが、われわれ人類なんだよ。だから、こんな小さな島にも渡ってきたんだ」

おじによれば、人類には、本能の赴くままに「行く人」だけでなく、あえてその場に「残る人」もいたのだという。「行く人」は、たどり着いた場所で新たな拠点を築く。「残る人」は、

「行く人」たちがいつでも帰ってくる事ができるように、残った場所での生活を必死で守る。両者が役割分担することで、人類はこの地球上に広まり、生き残ってきたのだ。

「健太は言ってたよ。もう、ほかの星に移住するしか人類の生き残る道がないんなら、自分がその水先案内人になる、アサギマダラになるって」

「アサギマダラに……」

「あいつはきつと、『行く人』なんだろうな」
そうつぶやいたおじの顔は、少しさみしげに見えた。おそらく、そのころにはもう、健太は孝一おじに、宇宙飛行士を目指す意志を告げていたんだろう。それが、未来の子どもたちのために自分ができる唯一のことだと信じて。それが、何もしてこなかった大人たちとは違う、自分なりの生き方なのだと心に決めて。

結果的に健太は、火星移住計画推進に携わる様々な人材の育成機関として新設されたアメリカの大学に合格する（正確には大学と同

等の教育機関で、そこに入学すれば学費免除だけでなく、生活費が支給された)。さらに大学院在学中に、宇宙飛行士としての資格を得た。そして、大学院を修了した年に、火星有人飛行の乗組員の一人に選ばれたのだ。健太が最年少のメンバーだった。いまや世界中の期待を集める存在となった健太のことを、孝一おじはどう思っただろう。けれど、それを尋ねることはできない。健太の渡米から二年半後に、孝一おじは、癌で亡くなったのだから。

健太が火星行きの宇宙飛行士に選ばれたことを知った夜、わたしは入院したばかりのこの病院の屋上から、久しぶりに夜空を見上げた。わたしが島に来たときに比べて、星もだいぶ見えづらくなっていたけど、それでも火星ははっきりと見えた。ちょうど、地球に最接近しているときだったのだ。集落の浜から見える喜界島くらい近い感じを受けた。あんなにはっきり見えているのなら、きつと難なくたどり着けるのではないか。そして、そこに無

数の居住ユニットが並ぶこともそんなに先の
ことではないのではないか。何の知識もない
くせに、わたしにはそれが確かなことのように
に思えた。

火星の居住ユニットに住む自分を想像して
みたこともある。

茶色い大地の上には、すでに百を超える四
角い居住ユニットが建ち並んでいて、そこに
様々な国の人々が暮らしている。大きなド
ム状の建物もあり、その中は地球から運び込
まれた植物で満たされている。ドームの透明
な壁の外に目をやれば、地球が小さく見えて
いる。居住ユニット内の濾過ろかされた清浄な空
気を吸いながら、わたしは、健康というものが
どういうものかを、久しぶりに実感すること
ができている。微熱も倦怠感も消え、からだに
元気が戻ってきているのを感じている。

どうしてそんな情景を、なかばわくわくし
て思い描いたりしたのだろう。いまにしてみ
れば、ずいぶん滑稽なことのよう to 思える。仮

にいまこの時点で、火星にそんな居住環境が整っていたとしても、わたしにはそこまで行く体力が、もう残っていないのだから。

火星行きを間近に控えた昨年暮れ、健太は数年ぶりに一時帰国した。そして、忙しいスケジュールの合間を縫って、孝一おじの墓参りのために、島にも日帰りに戻ってきた。そのとき彼から母のもとに、病院へ見舞いにいきたいという連絡があった。母はその申し出を心から喜んだようだけど、わたしはそれを断った。会いたくないはずがない。けれど健太にだけは、変わり果てたわたしの姿を見られたくなかった。

壁のモニターには、打ち上げのカウントダウンの数字が映し出されている。わたしは箱の中にある蝶形骨製品のレプリカを手にとった。そのキラキラ反射する真珠層を見ながら、高二のあの日、バスの中で見た健太の横顔を思い出した。その時の健太の頬は少しだけ赤らみ、輝いていた。バスが揺れるたびにかすか

に触れあった腕の感触がふいによみがえり、
思わず右腕に目をやった。しかし、そこにある
のは、点滴につながれたわたしの右腕だった。
あのところと比べようもないほど青白くやせ細
った腕。いずれこうなることは、ずいぶん前か
ら覚悟していたはずなのに、涙があふれるの
を、どうしても止めることができなかった。

2035年3月29日。日本時間の午後5
時25分。

健太の乗ったロケットは、カザフスタンの
打ち上げ基地から火星に向け飛び立った。打
ち上げは成功だった。病院の受付ロビーのほ
うから、歓声が上がるのが聞こえる。おそらく、
島中が、日本中が、世界中が歓喜の声を上げて
いることだろう。

健太はついに、アサギマダラになった。三万
年前の旧石器人たちのように、その軌跡に導
かれて、人類はこれから、火星という新たな
「島」に次々と渡ることになるのだ。

それが、人類が生き残るための最善策なのかどうかはわからない。移住した先が、人類にとって住みやすい場所になるかどうかともわからない。仮にこの地球がかつてのように美しいままであり続けたとしても、人類は本能に従って、いずれは宇宙に飛び出していくものなのか。それも、わたしにはわからない。

だけど、たとえそうした本能が人類にあるのだとしても、人が本能だけに突き動かされて行動するわけではないことを、きつと孝一おじも認めてくれるだろう。人は行動のための理由を、常に求める生きものでもあるのだから。

天変地異のない楽園を探すため、獲物のいっばいいる場所を探すため、あるいはただ単に、世界の広さをこの目で確かめたいから。そんな様々な理由付けで、自らを鼓舞し、人類はいつだって危険の中へ旅立ってきたのだ。

健太だってそうだろう。彼はいま、世界中の子どもたちと、そしてまだ見ぬ未来の子ども

たちへの懺悔の念とともに、「大人」としての責任を果たすため、火星へと向かっているにちがいない。病に苦しんでいる多くの子どもたちの姿を思い浮かべながら。もし、一つだけわがままが許されるなら、その子どもたちの姿の中に、たとえ米粒ほどの大きさであつてもかまわないから、あの時のわたしの姿も含まれていてほしい。

——火星に行ってみたくないか。俺が連れてってやるから。

壁のモニターは、まっすぐ空の彼方へ飛んでいくロケットをいつまでも映していた。わたしは、握力の衰えた手で、蝶形骨製品のレプリカを握るようにして祈った。

どうか、健太を守ってください。

健太は人類の希望であり、わたしの希望でもあるのだから。

健太が火星に到着するのを、この目で見届

けたい。そして、健太が無事地球に帰還した姿を見たい。わたしは「残る人」として、ここで健太の帰りを待つのだ。

モニターに映るロケットの軌跡を、わたしはいつまでも追いつけた。そして、生まれて初めて、生きていたいと、心の底から思った。

おわり